

大谷大学大学院 自己点検・評価報告書  
2016年度

真宗学専攻

仏教学専攻

哲学専攻

社会学専攻

仏教文化専攻

国際文化専攻

教育・心理学専攻

<自己評定> S	<委員会評定> S
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
研究のより一層の充実のために博士後期課程 3 年間の研究計画（例）を見直す。	
[達成基準]	
現在の博士後期課程 3 年間の研究計画（例）を改善し、新たな研究計画（例）の完成をもって達成とする。	
[行動計画]	
「博士後期課程研究計画（例）」原案作成にむけての検討会を 2016 年前期に開催する。 夏期休暇中に原案を作成する。 原案を真宗学専攻の関係教員に諮り、最終案を確定する。 最終案を大学院文学研究科長に提出する。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
「行動計画」は全て達成した。（検討会を経ての原案を作成し、その後、原案に対する意見を踏まえて最終案を作成し提出した。）	
・原案作成に向けての検討会を開催した。（2016 年 7 月）	
・夏期休暇中に原案を作成し、真宗学専攻の関係教員に諮り、最終案を確定した。（2016 年 9 月および 10 月）	
・最終案を大学院文学研究科長に提出した。（2016 年 10 月）	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
3 年間の研究計画に関して、指導教員間で再確認することが出来た。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
「博士後期課程研究計画（例）」（真宗学専攻）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
今回作成された研究計画(例)は、博士後期課程 3 年間でいつ何をすべきかのスケジュールが明瞭に示され、学位請求論文完成までの道筋を示す、大学院生にとってよきペースメーカーになると思われる。今回は研究計画（例）の作成が目標とされていたので、それが実行されたことを評価するが、同報告書では、研究の一層の充実のために、現在の研究計画（例）との相違点や改善された点について具体的に明記していただくとさらによかったのではないかと思われる。

<自己評定> S	<委員会評定> S
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
修士論文作成のための研究を一層充実させるため、修士課程 2 年間の研究計画（例）を作成する。	
[達成基準]	
修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成完了をもって、達成とする。	
[行動計画]	
<p>「修士課程研究計画（例）」の原案作成にむけての検討会を 2016 年前期に開催する。</p> <p>夏期休暇中に原案を作成する。</p> <p>原案を真宗学専攻の関係教員に諮り、最終案を確定する。</p> <p>最終案を大学院文学研究科長に提出する。</p>	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
<p>「行動計画」は全て達成した。（検討会を経ての原案を作成し、その後、原案に対する意見を踏まえて最終案を作成し提出した。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原案作成に向けての検討会を開催した。（2016 年 7 月）</li> <li>・夏期休暇中に原案を作成し、真宗学専攻の関係教員に諮り、最終案を確定した。（2016 年 9 月および 10 月）</li> <li>・最終案を大学院文学研究科長に提出した。（2016 年 10 月）</li> </ul>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
2 年間の研究計画（例）に関して、指導教員間で再確認することが出来た。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
「修士課程研究計画（例）」（真宗学専攻）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
<p>今回作成された研究計画（例）は、修士課程 2 年間でいつ何をすべきかのスケジュールが明瞭に示され、研究するとは具体的にどういうことかをイメージさせることにより、学部生から大学院生への環境移行をスムーズにするものと思われる。研究計画（例）の作成目的が修士論文作成のための研究の一層の充実とされ、それに見合う有用な内容に仕上げられたことを評価する。今後、この研究計画（例）の運用により、実際に大学院生の研究過程でどのような効果が見られたかについての検証をしていただきたい。</p>

<自己評定> S	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
2015年度導入の新規科目「真宗学特殊研究（論文指導）」の現状を共有し、課題や活用方法等について検討する。	
[達成基準]	
行動計画がすべて滞りなく実施できたことをもって達成とする。	
[行動計画]	
この科目は、修士論文作成に欠かせない文献読解力を養成するための基礎文献研究として開講している。以下のように現状を共有し、活用方法について検討する。 前期および後期の授業終了後に、「真宗学特殊研究（論文指導）」授業担当教員から授業や定期試験の現況や意見等を聞き取る。 その内容を修士論文指導教員の間で共有し、課題や活用方法等について話し合う会を持つ。 話し合いの要点を「真宗学特殊研究（論文指導）」科目担当教員に伝え、次年度の授業改善に資する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
「行動計画」は全て達成された。 ・前期および後期の授業終了後に、「真宗学特殊研究（論文指導）」授業担当教員から授業や定期試験の現況および意見等を聞き取った。（2016年9月と2017年2月） ・聞き取った内容を修士論文指導教員の間で共有し、課題や活用方法等について意見を交換した。（2017年2月） ・意見交換の要点を次年度「真宗学特殊研究（論文指導）」科目担当教員に伝え、次年度の授業改善に資するようにした。（2017年2月）	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
発表資料作成と発表および質疑応答を通して、各自の改善すべき点が具体的に明らかになっている。また各回の授業や期末試験（レポート作成）によって、文献研究の学び方（調べ方、資料作成の仕方、自分のテーマの見つけ方、論述の仕方など）に慣れていくことができている。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
①「真宗学特殊研究（論文指導）」のシラバス（2016年度） ②この授業に関して、修士論文指導教員間で共有した内容のメモ ・この授業は、学生（院生）による発表資料作成と発表によって進められている。このことによって、文献読解の問題点や発表資料の不備を授業担当者が具体的に指摘することができ、学生の現状を把握しながらの指導が可能となっている。 ・また学生同士では、専攻（真宗学専攻）を同じくするものに共通した課題や、また各人の問題意識などを知ることができ、お互いに刺激や啓発を受ける機会になっている。	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

授業担当教員から授業や定期試験についての聞き取りが前期・後期終了後に行われているが、その意見交換が年度の終わり（2017年2月）にしか行われていないのは勿体ないと思われる。前期終了時に明らかとなった課題や改善すべき点を後期の授業に生かすこともできるので、教員間の意見交換の場を増やすことが望ましい。また、具体的にどのような意見が提出され、次年度（2017年度）の文献研究指導に反映されていくのかについても【点検・評価】に示していただきたい。

<自己評定> S	<委員会評定> S
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の見直し 新たに改訂される「課程博士の学位授与に関する細則」に基づいて、3 年間の修学で学位取得が可能となる研究計画（例）を 11 月中までに作成する。	
[達成基準]	
当該計画の完成をもって達成とする。	
[行動計画]	
1、専攻教員間で、7 月中までに現行の問題点の洗い出しを実施する。 2、それに基づいた研究計画（例）を作成する。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の見直しを行い、新たな研究計画（例）を作成した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
大谷大学大学院学則 18 条の変更に伴い、博士論文提出の資格として、公刊論文が 3 点から 2 点に変更されたことを受けて、博士後期課程 3 年間の研究計画（例）を見直し変更した。その結果、適切に学生指導が行える環境が整備された。	
[改善すべき事項]	
目的が達成されたため、特になし。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
博士後期課程研究計画（例）（仏教学専攻）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
「課程博士の学位授与に関する細則」に基づいて、3 年間の修学で学位取得が可能となる研究計画（例）が作成されたことで目標は達成されたと考える。この研究計画（例）に基づき、今後学生にきめ細かい適切な指導がなされることが望まれる。以上の点から評価は S とする。

<自己評定> S	<委員会評定> S
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
2015 年度から実施された修士課程新カリキュラムに基づいた、研究計画（例）を 11 月半ばまでに作成する。	
[達成基準]	
当該研究計画（例）の完成をもって達成とする。	
[行動計画]	
1、大学院ゼミ指導教員間で、7 月中までに現行の指導内容を確認し共有する。 2、上記の確認には修士論文指導の具体的な内容とゼミの授業内容を含む。 3、それに基づいて、研究計画（例）を作成する。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
2015 年度から実施された修士課程新カリキュラムに基づいて、新たに研究計画（例）を作成した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
新たに修士課程の研究計画（例）を作成したことによって、より適切な学生指導を行う環境が整備された。	
[改善すべき事項]	
目的が達成されたため、特になし。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
修士課程研究計画（例）（仏教学専攻）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見> 修士論文指導の具体的な内容とゼミの授業内容について、大学院ゼミ指導教員間で共有を図り、「修士課程新カリキュラム」に基づく新しい修士課程研究計画（例）が作成されたことで目標は達成されたと考える。 今後は、この修士課程研究計画（例）を有効活用し、適切な学生指導を行っていくことが望まれる。 以上の点から評価は S とする。

＜自己評定＞ A	＜委員会評定＞ A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
新規科目「仏教学特殊研究（論文指導）」の活用方法について 「仏教学特殊研究（論文指導）」が修士論文作成にどのように機能しているかを専攻内で確認し、より積極的な授業内容となるよう教員間の合意を得る。	
[達成基準]	
当該授業の現状の点検と改善点を含んだレポートを 11 月中までに作成することをもって達成とする。	
[行動計画]	
1、「仏教学特殊研究（論文指導）」の授業内容の現状確認を 7 月中までに点検する。 2、改善点を含んだレポートを 11 月中までに作成し、大学院文学研究科長に提出する。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
新規科目「仏教学特殊研究（論文指導）」がどのように運営されているかについて、メールなどを使用して、大学院ゼミ担当者間で報告し合い共有した。その結果をまとめて、「2016 年度大学院修士課程仏教学専攻における特殊研究（論文指導）の現状報告」を作成した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
「仏教学特殊研究（論文指導）」がどのように運営されているかについて、大学院ゼミ担当者間で共有でき、授業改善や学生指導をより効果的に行うためのヒントを得ることができた。	
[改善すべき事項]	
特に改善を要することではないが、来年度以降も、ゼミ担当者間でこの授業の内容について情報共有・意見交換を行ってゆくことが望ましい。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
「2016 年度大学院修士課程仏教学専攻における特殊研究（論文指導）の現状報告」	

**＜自己点検・評価委員会使用欄＞**

## ＜所見＞

新規科目「仏教学特殊研究（論文指導）」における各教員の授業内容や授業運営について現状報告としてまとめ、教員間における共通理解を図ったことは評価できる。しかし、現状報告では取り組みの把握は可能であるが、現状での改善点や課題等については触れられていないため、来年度以降、本授業の成果がどのように学生に現れるのかを確認し、内容の充実を図っていくことが望まれる。以上の点から評価は A とした。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の見直し          博士論文作成を最終目標とした、研究の進め方、および指導教員の研究指導の指針として、従来の研究計画（例）を改訂する。          改訂に際して、今回はとくに次の点に留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提出資格の条件の一つである公表論文数の見直しに伴い、学内・学外専門誌への投稿スケジュールを見直す。</li> <li>・上記の点を含め、3 年目の後期に博士論文提出に向け、 Semester 毎に研究の進捗状況の確認事項を検討する。</li> </ul>	
[達成基準]	
行動計画にある、研究計画（例）の作成をもって達成とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2016 年度前期のあいだに、これまでの研究指導体制、研究計画（例）について改善すべき点、さらに、あらたな研究計画（例）に盛り込むべき点を検討する。</li> <li>2. 後期の開始までに、共同ゼミでの発表、学会発表、公表論文の執筆などの時期を軸とした研究計画（例）について、可能な案を作成し検討する。</li> <li>3. 2016 年度 11 月 15 日をめどに、新たな研究計画（例）を完成する。</li> </ol>	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
行動計画 1, 2, 3 のすべてを滞りなく遂行し、研究計画（例）の作成を完了した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
博士後期課程 3 年間の研究計画（例）を見直し、研究計画（例）の改訂がなされたが、この効果は今後の運用において検証されるべき事項である。	
[改善すべき事項]	
さしあたり改善すべき点はないが、実際に研究計画（例）が問題なく実行できるかどうかを検証する必要がある。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
博士後期課程研究計画（例）	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

## &lt;所見&gt;

目標である「研究計画（例）の見直し」は、「新たな研究計画（例）」の作成により達成されている。今後は「効果が上がっている事項」で述べられているように、実際に学生が「研究計画（例）」を参考とすることで博士論文へと結びつくかどうか、すなわち現実に有効であるかどうかをチェックすることになるので、その観点から学生の状況を的確に把握するよう望みたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
修士課程2年間の研究計画（例）の作成 これまで、明示化されていなかった、修士課程の研究計画（例）を作成する。	
[達成基準]	
研究計画（例）の完成をもって達成とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 前期 Semester 中に、これまでの指導方針や共同ゼミでの発表スケジュールなどを確認し、問題点を検討する。</li> <li>2. 後期開始をめぐり、「哲学特殊研究（論文指導）」の状況なども踏まえ、2年間の研究計画（例）の案を作成する。</li> <li>3. 11月15日をめぐり、研究計画（例）を完成する。</li> </ol>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
行動計画1, 2, 3のすべてを滞りなく遂行し、研究計画（例）の作成を完了した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
修士課程2年間の研究計画（例）を新たに作成し、研究計画の明示化がなされたが、この効果は今後の運用において検証されるべき事項である。	
[改善すべき事項]	
さしあたり改善すべき点はないが、実際に研究計画（例）が問題なく実行できるかどうかを検証する必要がある。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
修士課程研究計画（例）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
<p>目標である「研究計画（例）の見直し」は、「新たな研究計画（例）」の作成により達成されている。今後は「効果が上がっている事項」で述べられているように、実際に学生が「研究計画（例）」を参考とすることで修士論文へと結びつくかどうか、すなわち現実に有効であるかどうかをチェックすることになるので、その観点から学生の状況を的確に把握するよう望みたい。</p>

＜自己評定＞ B	＜委員会評定＞ B
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
新規科目「哲学特殊研究（論文指導）」の活用方法について 修士論文作成に必要な基礎力養成に向けた「哲学特殊研究（論文指導）」の活用方法に関し、カリキュラム全体における位置づけ、および複数指導体制の効果的運用に留意し検討する。	
[達成基準]	
行動計画の遂行をもって達成とする。	
[行動計画]	
1. 各指導教員が担当する「哲学特殊研究（論文指導）」と共同ゼミにおける年数回の研究発表との連動および役割分担について、課題となる事項を検討する機会をもつ。 2. 2015 年度における「哲学特殊研究（論文指導）」の実施状況を確認し、要検討事項を整理して、次年度のシラバス作成、授業運営に反映させる。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
行動計画 1 は滞りなく遂行されたが、2 については、現在、試行段階であり、検討事項の確認、整理には至っていない。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
新規科目「哲学特殊研究（論文指導）」は、共同ゼミでの研究発表を準備するのにより機会となっている。	
[改善すべき事項]	
「哲学特殊研究（論文指導）」と共同ゼミにおける研究発表との連動をより密接なものにする必要がある。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 目標のうち、「カリキュラム全体における位置づけ」のひとつを、共同ゼミでの研究発表準備の機会とするのは、有効である。「哲学特殊研究（論文指導）」の実施状況を把握し、その問題点を検討することは、当該科目の活用を考えるうえで必要と考えられるので、「行動計画 2.」については努力を望みたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の見直し	
博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の改訂 1～2 年目は、学位請求論文の作成の基盤作り、そして研究成果の（口頭及び著述による）発表、3 年目は学位請求論文の作成と、履修課程を段階的に位置づけ、現在の計画表を見直した上で、履修の段階に適切な、具体的な課題（修士論文の改訂、文献や資料の収集、精読、発表など）を設定した研究計画（例）を作成する。	
[達成基準]	
研究成果の発表から論文提出まで、学修段階に応じた適切な課題を設定しているか、それに基づいた研究計画（例）改訂版が作成されているか。	
[行動計画]	
1～3 年次に応じた課題（口頭及び著述による発表、学位請求論文の提出）を設定し、研究計画（例）の改訂を行うために次のタイムリミットを設定する。 7 月 現在の研究計画（例）の見直し 9 月 履修段階に応じた適切な具体的な課題の提示 11 月 改訂版の提出	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
目標に定めた博士後期課程研究計画（例）を作成した。学位請求論文提出条件の変更点などを考慮し、実現可能な計画設定を心掛けた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
研究計画（例）については、以前と比べて、より学修の実情に即したものになったと思う。ただ、現在、博士後期課程在学生在がおらず、来年度もない。教育効果に関しては、点検・評価の対象たる具体的な教育活動実践を遂行できておらず、判断材料がない。	
[改善すべき事項]	
博士後期課程入学生があり、教育実践が一定におこなわれた時点で改善すべき事項については考えた。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
2017 年度博士後期課程研究計画（例）（社会学専攻）	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

## &lt;所見&gt;

学位請求論文提出条件の変更点を考慮した上で、研究成果の発表から学位請求論文の提出に至るまでの学修段階に応じた適切な課題を設定し、実現可能な研究計画（例）が作成されているので、目標については達成されたと考える。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成	
修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成 課程の 1 年目は修士論文の作成の基盤作り、2 年目を実際の論文作成と段階的に位置づけ、「社会学特殊研究（論文指導）」との連動をはかりつつ、履修段階に応じた具体的な課題を設定した研究計画（例）を作成する。	
[達成基準]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマ選択から論文提出まで、具体的にその年次及び学修段階に応じた課題を設定したか、それに基づく研究計画（例）が作成されたか。</li> <li>・「論文指導」との効果的連動が見られたか。</li> </ul>	
[行動計画]	
前期（7 月）、夏休み明け（9 月）、後期（11 月）の 3 期に分けて研究計画（例）のタイムリミットを設定する。	
7 月 履修段階に応じた課題（テーマの選択のための文献収集、テーマの絞り込み、文献精読、調査の準備、口頭発表及びフィードバック、研究計画（例）作成、論文のアウトライン作成、論文作成、推敲など）の案の提示	
9 月 課題の見直し	
11 月 チャート形式の研究計画（例）を作成	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
研究計画（例）を作成した。大学院運営委員会で研究計画（例）案を専攻間で参照しあう機会があり、学生に親切的な具体性とわかりやすさに配慮した表現にすることになったが、できるだけそうなるように心がけて作成した。入学後の学修をより具体的にイメージできるものになったと思う。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
研究計画（例）については、上述したように改善できたと思う。ただし、現在、修士課程在学生在いないので、教育効果の点検・評価の対象たる具体的な教育活動実践を遂行できていない。そのため、教育効果に関しては、評価するための判断材料がない。	
[改善すべき事項]	
現時点ではない。来年度は 1 名学生が入学する予定なので、当学生の研究計画（例）の参照状況をみて、改善すべき事項については考えたい。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
2017 年度修士課程研究計画（例）（社会学専攻）	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

1年目を修士論文作成の基盤作り、2年目を修士論文作成と位置付けた上で、テーマや研究方向・研究方法の決定について文献資料収集や調査を実施する場合の実施計画も含めながら、具体的にわかりやすく研究計画（例）が作成されているので、目標は達成されたと考える。教育効果については、2017年度に入学予定の学生の学修状況を見ながら、改善すべき事項があれば検討していただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
○博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の見直し 博士學位請求論文の提出資格および年間スケジュールの改訂にともなって、既存の研究計画（例）を再検討し、博士學位請求論文の執筆、提出が十全に遂行しうる研究計画（例）の大綱を策定する。	
[達成基準]	
博士後期課程 3 年間の研究計画（例）の作成を以て目標の達成とする。	
[行動計画]	
○前期：現研究計画（例）の現状の課題と諸改訂に伴う問題点を把握する。 5 月 現状の課題を抽出する。 6 月 諸改訂に伴う問題点を抽出する。 7 月 新研究計画（例）作成に向けての問題点を整理する。 ○後期：新研究計画（例）の大綱を策定する。 9 月 新研究計画（例）の要点を検討する。 10 月 新研究計画（例）のスケジュールを検討する。 11 月 新研究計画（例）をまとめる。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
おおむね達成できているものとする。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
博士後期課程の研究計画（例）について確認ができた。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
博士後期課程研究計画（例）	

<自己点検・評価委員会使用欄>
<所見> 博士後期課程 3 年間のうちに、3 本の論文を公表し、実質的に、2 年半で博士論文をまとめることは非常に難しいと思われる。このため、入進学時から 3 年間の研究計画の見通しを常に念頭において研究を進めることは重要であり、その研究計画（例）を示せたことは評価できる。今後は、学生にこの研究計画（例）を示して実際に自らの研究計画を立てさせるなどの具体的な指導に活かしていくことを期待する。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
○修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成 博士後期課程の研究計画（例）に準じて、修士論文の執筆、提出が十全に遂行しうる研究計画（例）を策定する。	
[達成基準]	
修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成を以て目標の達成とする。	
[行動計画]	
○前期：修士課程、特に修士論文の執筆、提出にむけての現状と課題を把握する。 5 月 現状の課題を抽出する。 6 月 望ましい修士論文の執筆計画のスケジュールを確認する。 7 月 研究計画（例）作成に向けての問題点を整理する。 ○後期：修士課程 2 年間の研究計画（例）の大綱を策定する。 9 月 研究計画（例）の要点を検討する。 10 月 研究計画（例）のスケジュールを検討する。 11 月 研究計画（例）をまとめる。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
おおむね達成できているものとする。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
修士課程の研究計画（例）について確認ができた。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
修士課程研究計画（例）	

<自己点検・評価委員会使用欄>
<所見> 修士課程 2 年間のうちに修士論文をまとめるためのステップが研究計画（例）として明確に示されている。所期の目標は概ね達成されたものと考えられる。

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
○新規科目「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法について、修士論文を十全に作成しうるため、「仏教文化特殊研究（演習）」などとの関連性を考慮しながら、指導体制を踏まえて「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法について検討する。	
[達成基準]	
[行動計画]がすべて滞りなく実施できたことを以て目標の達成とする。	
[行動計画]	
○前期：「仏教文化特殊研究（論文指導）」の現状を把握する。 5月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の現状を共有する。 6月 「仏教文化特殊研究（演習）」などとの関係について整理する。 7月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の問題点を整理する。 ○後期：「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法を策定する。 9月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の位置づけを検討する。 10月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の内容を検討する。 11月 「仏教文化特殊研究（論文指導）」の活用方法をまとめる。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
おおむね達成できていると考えられるが、日程の調整がつかず、担当教員全員が集まり、意見の交換や検討をする時間を、当初考えていたほどは取ることができなかった。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
学生に論文への意識を持たせることができたなど一定の効果がみられ、問題点や活用方法なども検討することができた。	
[改善すべき事項]	
担当教員が集まることのできる時間が少なく、もう少し全体での検討の時間を増やす必要がある。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

<自己点検・評価委員会使用欄>
<所見>
新設科目「論文指導」の現状や活用方法について、担当教員全体による情報共有と活用方法の検討をすることが行動計画として挙げられているが、これらについては概ね実行できたと考えられる。しかし、参加できた教員の数が十分でなかったり、具体的な検討内容が示されていないなど、効果の点では疑問の残る内容であった。修士課程の学生にとって修士論文をまとめることが最終的な目標であるので、この「論文指導」の科目のより有効な活用方法を検討していくことを期待したい。

＜自己評定＞ S	＜委員会評定＞ S
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
博士後期課程 3年間の研究計画（例）の見直し	
[達成基準]	
行動計画に基づき、2017年度の『履修要項』に新たな博士後期課程 3年間の研究計画（例）を掲載できたことをもって目標が達成されたとする。	
[行動計画]	
以下の行動計画を実行するに当たり、「国際文化特殊研究（演習）」担当の教員が専攻会議を開いて、それぞれの指導方針を話し合い、博士後期課程 3年間の研究計画（例）を検討する。	
<ol style="list-style-type: none"> <li>現在の学生の研究状況を反映した研究計画（例）を考える。すでに 2009 年度以降入学の学生のみであること、留学生が多いことなどを考慮する。</li> <li>研究計画（例）に、授業科目との関連を記入する。</li> <li>学外学会誌・学内の研究紀要への投稿の時期を見直す。</li> </ol>	
○前期	
6月：現在の研究計画（例）の問題点を洗い出す。	
7月：現在の学生の研究計画を踏まえて、研究計画（例）に必要な項目を選定する。	
○後期	
10月：3年間の研究計画（例）を作成する。	
11月15日：再検討の上、最終的な研究計画（例）を完成し大学院文学研究科長に提出する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
従来の博士後期課程 3年間の研究計画（例）を見直し、2017年度『履修要項』に掲載することができたので、行動計画の目標は達成できた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
現在の学生の論文執筆状況および博士論文提出の資格として公刊論文が3点から2点へと変更されたことを反映し、また現在の学生の論文執筆状況を考慮して、合同ゼミでの研究発表およびそのための準備をペースメーカーとして論文執筆を進めていけばよいことを、具体的な研究計画（例）として示すことができた。	
[改善すべき事項]	
今回の研究計画（例）は、モデルケースを示しただけであり、実際にそれを各学生が自らの研究にどのように活かしていくかについての指導は、今後の課題となる。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1. 2017年度『履修要項』掲載「博士後期課程研究計画（例）」	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

明確な行動計画を立て、それを着実に遂行し、かつ次の課題をも設定できている。

＜自己評定＞ S	＜委員会評定＞ S
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
修士課程2年間の研究計画（例）の作成	
[達成基準]	
行動計画に基づき、2017年度の『履修要項』に修士課程2年間の研究計画（例）を新たに掲載できたことをもって目標が達成されたとする。	
[行動計画]	
以下の行動計画を実行するに当たり、「国際文化特殊研究（演習）」担当の教員が専攻会議を開いて、それぞれの指導方針を話し合い、修士課程2年間の研究計画（例）を作成する。	
<ol style="list-style-type: none"> <li>現在の学生の研究状況を反映した研究計画（例）を新たに作成する。</li> <li>修士課程のみで卒業する学生と博士後期課程に進学を希望する学生がいること、また留学生や他大学からの入学者、研究テーマの多様性などに対処した研究計画（例）を考える。</li> <li>研究計画（例）に、授業科目との関連を記入する。</li> </ol>	
○前期	
6月：修士課程の研究に必要な項目を洗い出す。	
7月：最近の学生の研究状況について、情報を共有する。	
○後期	
10月：現在の学生の研究動向を踏まえて、研究計画（例）をまとめる。	
11月15日：再検討の上、最終的な研究計画（例）を完成し大学院文学研究科長に提出する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
新たに修士課程2年間の研究計画（例）を作成し、2017年度『履修要項』に掲載することができたので、行動計画の目標は達成できた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
学術論文の初心者に対して、合同ゼミでの発表を中心にしながら、修士論文完成までのプロセスを具体的にイメージできるようになった。学部の卒業論文と修士論文のギャップを考えると2年間の修士課程は短い、その時間を有効に活用できる見通しを立てられるようになった。	
[改善すべき事項]	
今回の研究計画（例）はモデルケースを示しただけであり、実際にそれを各学生が自らの研究にどのように活かしていくかについての指導は、今後の課題となる。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1. 2017年度『履修要項』掲載「修士課程研究計画（例）」	

## ＜自己点検・評価委員会使用欄＞

## ＜所見＞

明確な行動計画を立て、それを着実に遂行し、かつ今後の課題も設定できている。

＜自己評定＞ A	＜委員会評定＞ S
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
新規科目「国際文化特殊研究（論文指導）」の活用方法を検討する。	
[達成基準]	
新規科目「国際文化特殊研究（論文指導）」の指導内容を検討し、その結果を2017年度シラバスに反映することで目標を達成したとする。	
[行動計画]	
2年間の修士課程で修士論文を作成する学生のために、新規科目「国際文化特殊研究（論文指導）」を有効に活用できるよう、専攻全体の方針の確認をする。既に1年間開講しているので、その経験を専攻全体で共有する。また、合同ゼミとの関係を明確にし、シラバスを専攻内で統一的に書けるよう、検討する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
「国際文化特殊研究（論文指導）」のシラバス内容を検討した結果、その内容には大きな問題点は見られなかった。シラバスの「学習到達目標」については、必要な修正を加えることができた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
大学院に進学した学生に、学術研究の基本的な方法や研究の進め方を指導することで、大学院の初年度教育を充実させることができた。	
[改善すべき事項]	
「国際文化特殊研究（論文指導）」は修士課程の1年しか履修できないが、大学院の学生教育の現状に照らすと、この科目を継続して履修する必要があることが分かった。複数年次の履修が可能となるよう、より柔軟な体制を作ることが望ましい。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1. 2017年度シラバス「国際文化特殊研究（論文指導）」	

## ＜自己点検・評価委員会使用欄＞

## ＜所見＞

当該科目の活用の検討と実際の活用は十分に行われている。その結果、改善点が見出されたのであるから、今年度の活動としてはSと判断した。

＜自己評定＞ A	＜委員会評定＞ A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
シラバスの内容の見直し	
[達成基準]	
行動計画に基づいて検討した結果を2017年度シラバスに盛り込むことで目標を達成したとする。	
[行動計画]	
<p>1. シラバスのうち、特に「学習到達目標」の書き方がバラバラなので、専攻内での統一した書き方を検討する。</p> <p>2. 演習科目など、毎回の授業に特定のテーマを設けづらい科目について、「授業計画」の書き方を工夫する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
「学習到達目標」について、学生の視点からその授業を通して何を達成すべきかがわかるような表現を検討し、シラバスに反映することができた。予復習の時間の表記を分単位で書くように専攻内で統一をはかり、また記述が抜けている項目について補うことができた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
シラバス全体を通じて統一を図ることができた。特に書き方が最も不揃いであった（そして意味が不明確であった）「学習到達目標」の項目を専攻の科目として統一的な表現に改めることができた。	
[改善すべき事項]	
各科目の内容に関して、専攻内での意見交換を行う機会はなかったため、重複した内容が多かったりして、個々の科目の特徴を表現し切れていなかった。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1. 2017年度 Web シラバス「大学院国際文化専攻科目」	

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 行動計画(1)は十分達成されたが、行動計画の(2)が抽象的であるため、達成目標が曖昧となった。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
修士課程 2 年間の研究計画（例）の作成	
[達成基準]	
研究計画（例）を作成できたことを持って達成とする。	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期 M1：研究計画（例）作成、テーマの絞り込み、文献収集、ゼミ発表とフィードバック</li> <li style="padding-left: 2em;">M2：題目提出、テーマ・構成の見直し、修士論文執筆計画に基づくゼミ発表とフィードバック</li> <li>・後期 M1：修士論文執筆計画作成、論文のアウトラインの作成、ゼミ発表とフィードバック</li> <li style="padding-left: 2em;">M2：修士論文執筆計画の再確認、修士論文執筆計画に基づくゼミ発表とフィードバック</li> </ul> 11 月中旬には上記の内容を含んだ形で研究計画（例）を完成させ提出する。	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
専攻内の大学院委員の先生方にメールによる添付ファイルで原案を示し修正を依頼、「研究計画（例）」を、期限内に作成し提出することができた。上記の行動計画に示した内容を含めた上で、さらに詳細な事項を書き加えた研究計画とすることができた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
これまで明確にされてこなかった修士課程における具体的な研究計画（例）（案）を作成できたため、今後、院生の指導を大学院担当教員の共通認識のもとに行うことができるようになった。	
[改善すべき事項]	
大学院委員の先生方への意見聴取が、メールによる意見交換に終わってしまったため少数の修正案が示されただけであった。また、現段階で考えられる最も妥当な研究計画（例）（案）と思われるが、諸事情により改善すべき点が指摘された場合には、さらに考え直すようにすべきである。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1 「修士課程研究計画（例）（教育・心理学専攻）」	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

&lt;所見&gt;

目標、行動計画のもと、着実に取り組み、期限内に修士課程 2 年間の研究計画（例）を作成提出している。取り組み、成果とも明確であり、A 評価が妥当である。

＜自己評定＞ A	＜委員会評定＞ A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>「授業計画（シラバス）」の項目記載内容の見直し</p> <p>「授業計画（シラバス）」における各項目（特に学習到達目標）の記載内容を見直し、記載形式を統一する。</p>	
[達成基準]	
年度末に記載形式を統一した形で「授業計画（シラバス）」を作成できたことをもって達成とする。	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院科目担当者間で「授業計画（シラバス）」の各項目の記載の仕方について事前に打ち合わせを実施し、情報共有を行う。</li> <li>・次年度のシラバス作成の際には、特に学習到達目標の書式の統一を図る。</li> </ul>	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
シラバス作成時期に、大学院科目担当者全員にメールで具体的な修正を依頼した。特に学習到達目標の記載について記載形式を統一するように留意してもらった。完成した「授業計画（シラバス）」の確認を行い、記載形式が統一されていることを確認した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
シラバスの記載形式が不統一であったことを大学院科目担当者に周知し、変更を促すきっかけとなった。特に学習到達目標の記載について、記載形式を統一することができた。	
[改善すべき事項]	
「記載形式の確認」を年度末に限られた時間で行ったため、運営委員一人の判断となってしまった。科目担当者全員で確認する時間が取れなかったことが改善点である。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
1 来年度のシラバス例	

<b>＜自己点検・評価委員会使用欄＞</b>
<p>＜所見＞</p> <p>目標、行動計画に基づいて取り組み、「授業計画（シラバス）」における各項目（特に学習到達目標）の記載内容を統一することができたことは評価できる。ただし、シラバス全体の記載内容についての検討、および改善すべき事項に記されているように、事後であっても専攻全体で確認、共有することができるような対応が望まれる。評価は A とする。</p>